和字
仮入

往生要集

地獄物語

上

天保　再板

恵心僧都著述

平仮名

地獄
六道
極楽

往生要集

全部
三冊

京都書林

風月堂
向壽堂
文林堂
文政堂
積玉堂

梓

往生要集序

天台首楞厳院の沙門
源信ことをえふ

それ。おもんみるに。うまれがたくして。ようやくこれをうけ。
成仏をもとめて。ながきをもつて。ようやくこれをとげて。
みちりの。濁世末代のものの。たのみをさんぬべき。
日ならず。ときすでに。ちかきに。あり。いまこの。
ごとくわれもがごとき。だしへなるものは。偏に男女
ともにつけて。ものきも。智ふかく。おろか
なるも。罪ふかく。ごうのもの。をすくはんがためにこれをすすめ。

九曜文庫

つぎんや。たぐし。祇園の義法。その徳、
文。ひろくるほの業用。その徳り又おろ〜。
利根上智にして。くるしくすゝやそさ。八八
いまぐ。ゝてりぐきみちとせぐ〜ん。まうごと
くあるたろよにさみきものあさ〜めぐさ化理
とさてり。ゆじ〜たちとげ侍んや。この
ゆえ。会仏乃一門。おすひより。無心変意して
いさら。種種の中に約束乃文。あつめ。書
にて。侍りて。つゝ。ゝてとひ〜きこそ。陰

きろよさ〜りやそく。約束を。ゝてさんべて。
十門あり。まくと二門。ゝてよけるに。一つよ八厭離
穢土。二つよ八欣求浄土。三つふ八極らくの
徳相。四つよ八正修会仏。五つよ八助会の法方
六つふ八別付念仏。七つふ八念仏乃利益。
八つよ八念仏の徳授。九つよ八往生の法業。
十ふ八向善料。等たなり。こゝとこゝ社の右
りとさて。ゝとそ。ゝとさりなん。侍とど
し侍ふ

目録

獄雜樣たち事

上のまき

第一　等活地獄乃事　四丁
第二　黑繩地獄の事　十丁
第三　衆合地獄の事　十三丁
第四　叫喚地獄の事　十七丁
第五　大叫喚地獄の事　二十丁
第六　焦熱地獄の事　二十三丁
第七　大焦熱地獄の事　二十六丁
第八　阿鼻地獄の事　廿八丁

中のまき

第一　餓鬼道乃事　二丁
第二　畜生道乃事　六丁
第三　修羅道乃事　九丁
第四　人道乃事　十二丁
第五　天道乃事　十五丁
第六　六道の獄おと結事　十七丁

下のまき

第一　聖衆來迎乃事　二丁

第二　蓮花初開の楽の事　三丁
第三　身相神通の楽の事　四丁
第四　五妙境界の楽の事　五丁
第五　快楽無退の楽の事　十三丁
第六　橋結縁の楽の事　十四丁
第七　聚会共住の楽の事　十五丁
第八　見仏聞法の楽の事　十六丁
第九　随心供仏の楽の事　十八丁
第十　増進仏道の楽の事　十九丁

目録終

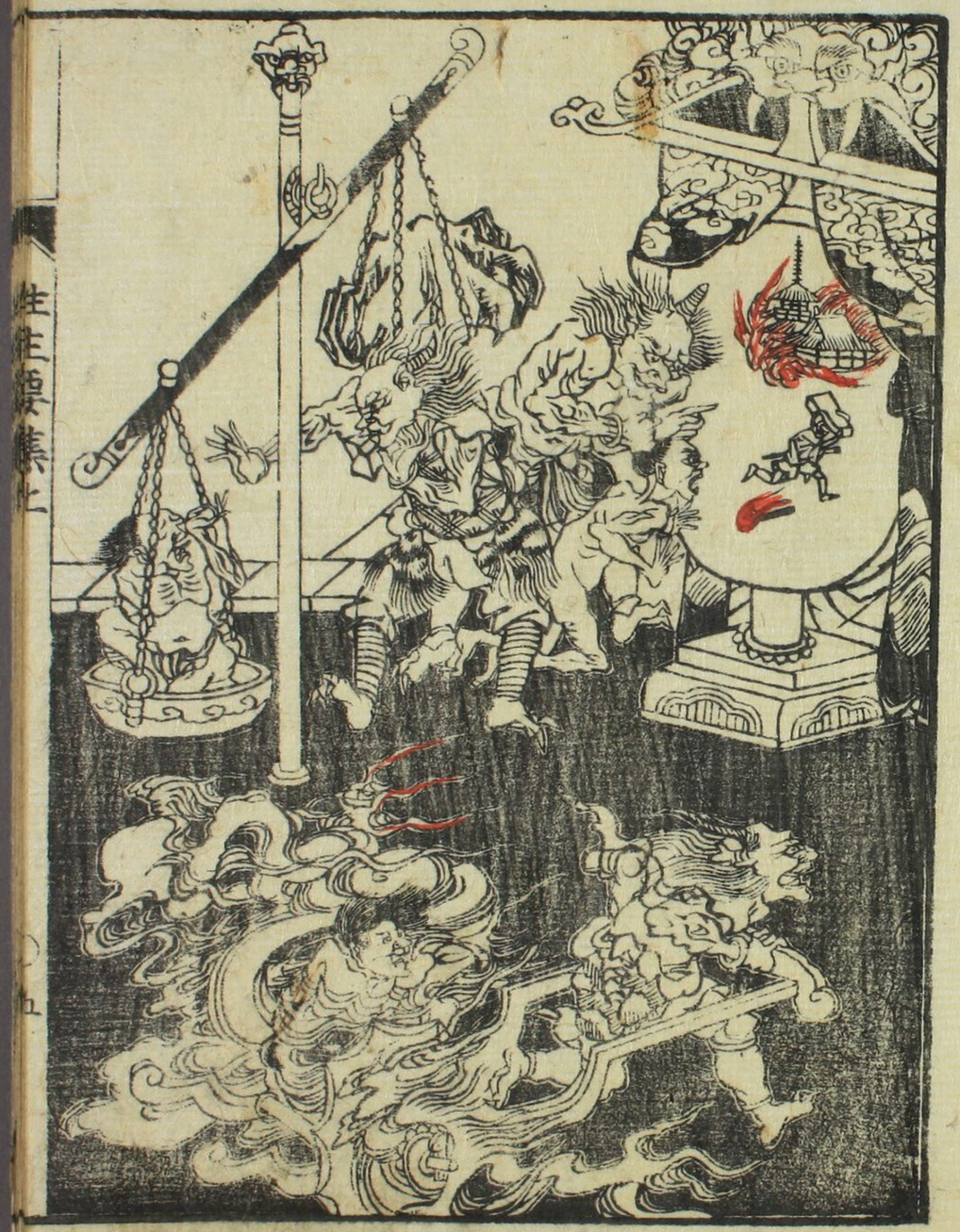
往生要集巻之上

地獄物語上

此集ハ余も如来の教の大ひなるひと。是を学ぶと雖ども。大和尚の教の方元入道ども。学ぶ
徒やすんぬ安くして。一入往生の道に入ん後せうの為ん也

大文　第一厭離穢土の事

それ。ちんりゑどくふハ。げぐりを去ていとひ離るゝ。ぜんぜんの世ゝを。
ゑ道ゝとゝく穢土ハ。初て是を二界とゝり。こゝ。いハ安きゝ。
ごゝと仏ときのひて。人の中と宅ゝ。ゑちんりすぐき
者ゝ。今ゝ。それちんりの相とゝ。ゝ子ゝ。抑ゝて七種ゝ。ゝ。地ゝ。二ゝ。ハ傍生
三ゝ。ハ餓鬼。四ゝ。ハ阿修羅。五ゝ。ハ人間。六ゝ。ハ天人。七ゝ。ハ地獄。八ゝ。ハ地獄



才一ゑぢこふ又ゑけて八つあり。一つゑハ号活。二つゑハ黑繩。三つゑハ合ほつふ八叫喚。四つゑハ大叫喚。五つゑハ焦熱。六つゑハ大焦熱。七つゑハ大焦熱。八つゑハ無間なり

才一　号活地獄の事

○一つゑとゑ号地ごと云ハ。山間浮提の下一千由旬ふかせたるこ一万由旬なり。山中の罪人たがひに害んとつぐきて。美なまく逢ん。ば獵人の庶こうくぶかし。なの〳〵くろがゝの刀ととぐなて。たがひに服とつくる。きくもとひきさき血流れきくもとそて。だ骨ばかりのこる。或ハごとくども。くろがゝの杖と成て。からくろ見まで。あまゝ〳〵おひ。ぎて身裂破れくぶくるゝ水のごとし。あるひハ極めて利刀にて分〳〵に肉を切さくる。一厨者の屠肉を切がゝし。塩にて流き風ふき来ればよみがへりて安の形とく。又たちまちくおのごとく苦とうるゝ。あるハ虚空さき有て

才のもろ〳〵ゝ有情をそ号活地獄べしとゝひ。或ハ獄卒くろがゝの。はすまくとゝをそ地とおそ活〳〵と唱ゆとゝふ。人見れ牛もとゝをそ王天の一日一夜として。ま寿命五百歳く。又ゆそ天乃寿命を。これ地ごくの一日一夜として寿命五百歳く。教牛〳〵る者ハ地ごくふ。又ゆ地ごくの四方の門の外ふ。券屋九別ふとそ十六の地獄有。一つゑハ屎泥ふとゝふ。地ごくふハ極めて。悪き糞と泥とゝう。ま味ひ。ま毒ぶ有。金剛のくちバ有。ま毒ぶ中ふ充満ちる罪人とゝを中ふ居て。ばりつく糞と食とゝ。りろ〳〵乃ゝ集りて。ゝ罪人を一時ふきりひとろふて。皮と破り。ちゝ〳〵とて。かゝとうゝ骨とす。む〳〵糞ところ〳〵ちるとゝ。ゝ地ごくに落ゝ二つゑハ刀鉾ちゝとゝふ地ごくハ。くろがゝの樹をめぐりかとそちゝる。ま十由旬猛火さゝんふ。てきゝふ。ま中にちゝ人罪火ハ九ふ〳〵ゝ。ゝ

地獄の苦しみ

ごとし。はぢ猛火ハ。ほのほふる事ハ。蓮のごとくにぐるくぷきて
鐵の雨のごとくにしてしかもあれごとし。又ほそざの林ハ。その葉
利ことハ。髮をぎ針毛とふさりきて。たまゝ〳〵も微妙に寄ぬ。
飛人のあるハ。又ほそざとふ。虚空より大海のおつるに似たり。かの
ごとく。もろ〳〵の苦ぐんまぐるまを。たゞ思ふべくして。苦しのとしぶ
ゆえ殺生しるゆへ。はぢごくふ。むつぐ。三つふハ。鬼卒ふとふ。はぢごく。鬼
人どもてくて。くろぐの苦の中ふいまを。先とせんで。苦しの事ごとし
もし殺生して善食したるゆへ。はぢごくにおちるふ。多苦とも。はぢ
地獄ハ十ふ住処の苦しの楚毒あり。具ふ述べ。もし縄とふて人と
作り杖とふて人とおく。人とうて走ふ。逃ゆしめ。決しきおうり人の苦
煩と。まずて人とうまし。小児と怖ぐしめ。はちふ先らのごとき。極くふ

人とうませしうりの結はぢごくふ。まつふハ。寒冥ふとふ。はぢごく
の鬼人ハ。黑闇の中ふ居て。ふ多ふ。焼こうる。又大方のまつ風吹金剛
山の山と山とを合して。おとすごとし。又焼鉄
ぶるるの利刀ふて切刻ごとし。もし大火をふて羊の口鼻とふ。こ
つの地の中ふ魚とたゝて押殺しるゆへはぢごくふ落ふ。六つふハ不善
と云。はぢごくふ大火をあつて。屋敷方をやきる事。又焼鉄ふ
多大。瓶その中ふ入めて多くして。角れの毛とぶち。ふ。ふきうり食
ふ。骨肉粉ぢきこぶり。金剛のくちばしある虫骨の中ふ注ぎて髓と
食べり。むし見とうさ太数とうち。とそうべきおうとして多くの
ところしたるゆへはぢごくふ落ふ。七つふハ極苦とふ。決しき俳の
えよあつて。ふるふ。焼ぶ。もし殺生し

刀梅小
発奴小

小屋泥小

多苦不
あんめいーよる夏不

不森不
極苦不

たるのゆへ地獄よりたちて

ことごとくをはりのごとくにして九つハ後の中ゆ　まことにかくのごとくなり

第二　黒繩地獄の事

○二つにはいはく黒繩地獄といふハ。等活地獄の下に有。豎横縦さ糸
の如し獄卒飛人とをもつて鐵の地に打ふせて燃鐵の繩をもつて豎
よこ布墨をうちて燃鐵の斧をもつて。さてそのうちの繩にまかせて
てきりもきり。あるひハ鋸をもつて或ハ刀をもつて脇わきをえり
刮。百千段に切てばらばらとなす。又或ハ叉もつて。燃
鐵の繩をとりけてまた横ゝ。また飛人と追入れ。ばらばらとなして。燃鐵
の繩方ゝまつりて肉とともに骨とこがしてまたもとのごとくなる。
乃至ばらばら。山のうへまでもれ繩をとりて

方乃至ばらばら。斧をあまたまたなりぐりぐり
ゆへ。湯玉たるごとくなる。飛人よりあつめて山と負せて繩の
よりとりてもとのごとくなる。ばらばらとなす。の大ぶまの中ゆおちて
ぐけふぐるぐるとまきいまりのごとく骨肉もろもろとくだけくる。ぐちゃ
ごとくなる。ぐちゃぐちゃ十六別ふれもろもろの苦
をとりてふ債をくるくる。獄卒飛人と呵責していくるぶハ
こと無量の苦。これわざのゆへにもろもろの人とをしてそのくに人と待り
圓廣まれまへとなりぐるる。如是地獄ゆ出ることもと
惡業に食ハるゝ。まあるゆ惡業の報に業ものすゝとこ
ろ。後の二つの地獄までハ。ちぢごのおとり者とをもふ。ぐ
いはゆくるゆ。ぐるぐるくるくるまでぐるぐるくて。人間の一日

十二ノ王滝夜叉姫の図

蛇と如利天の二日一夜うして命一つ宿る蛇。又如利天の命とこの
ぢごくの一日一夜として命一つ宿るぞかし。衆生係属の者ひぢごくふちつる
也。又異類のぢごくあり妖怪受苦とるぞく鬼人とけいしくるるこの
無量由旬の鉄のよりよりおきて妖怪のとろき絶まぢ俵りつる
ぎたりて後ようこの下、皆物地ありて利刀まもしのごとくよ
あてる処つさたとろろの岩ほ牙ほ物これと常ふ一刀ふるる
ぶんよとるをちる。おりどりひげて吼喚どもたもるものがしりしりと
流血の海ようて如きことあるす一切とりこび流りり身体
ふげてこづりり敷したるこのひぢごくふ落りく。又異類あり異類形
とるぞく獄卒ども大きこいうてくろくの杖とりわけ手ようて
鉄蛇こしやきりのひいぬ火をれくんぐのりるとひしめりし盛

いろ〳〵のものをひきぐ者とつゝそうゝろとゝけ迦をめて。こと
ぐくきりさんゝゝゝ射る。もゝゝめどしをぞる石ぶ。人ところゝゝと落り
て金ごうびゝ。えいぢゝゝくゝおひる水りゝ

第三　阿含地獄の事

○三つ小者ごう地ぢくとつふハ。縄ぢごくの下にあり。堅よこちゝ小間ゝ
はぢごくとしいろゝの山おわくわり。ゝもゝゝづきもゝひゝ。ゝ牛ゝゝる炎あの
ゝろゝ山獄卒ども。鉄杖鉄杵ゝすゝまゝいろゝの責道具を持て。罪人とう
ゝ地ゝて。ゝのゝのゝ人ゝ迦入ゝ。ゝゝの山せまりゝうて。金ゝたゝん。ゝ仲
ひゝけゝぐひてゝゝゝ。血ハ地ゝゝそゝ。ゝゝひゝ。ゝゝゝの山ゝゝゝゝゝ罪
人をおくゝぐゝゝ。ゝのごゝ。或ハ石ゝうゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝれ
をゝし。ゝゝひゝくゝゝの山小入ゝ。ゝゝの柱ゝゝゝ。ゝ柱ゝの獄

の鬼ゝゝ。獄卒の所ゝ。ゝ柱ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝの
ゝゝくゝゝひゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

十二流合地獄の図

紙ゝそ為とそうちゝさ。骨をとゝ。筋とゝ。こハそを限
ゝひなゝゝを。業にひゝまて狂こひゝく。紙とそのきゝ
ゝゝ。ゝの女房とそれハ。又地ゝありて。ゝゝゝげふ媚ゝふゝめる月ゝ
とにて。木のゝとゝある飛人をゝそ。ゝひゝるハ。ゝれ海ゝゝ業ゝゝうゝ
ゝさたりゝゝ。海今をにゝそゝれゝちゝゝゝるゝゝふちゝゝゝとゝ
ゝゝるゝゝく。木れゝゝとふゝまゝゝさたゝり。むゝゝゝゝゝゝ金さゝんに
ゝゝゝゝ又木のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紙の木の業ハゝれゝゝゝひて。又ゝ為を
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

及まとめ苦んの苦をせめられてなりて。又りぶ為の苦を受ん。まづ獄卒ころ
ものとりつきあり。鍋を湯にしてゆ門よりそこげば男のうちふぶれ
入わまるく。又猛火府とまりて口鼻よりぶれ出るゆ。たの牲んの苦を為ん
二つの苦をうける。生涯百々年のうちもやまず。又多苦悩とも苦悩
いうもたとゆ男女共に苦しらめあくふたちて苦をうけ
る。むりの男女とこれば生涯こと久く牲さ苦をそちづき苦をき
いづくさきく。はおとこ男什こるやうきてどけちり配したりて又いさ
又りの大さにおそろしくして走りまげこりて苦しらく苦ろ苦
のはだしける。為なのふのはいる物こ苦とくふ又忍苦とふ別苦乃
地ごくいる。他人の女房ちわとを犯るめあふおちて苦をうるあり。
獄卒鬼人ところへて苦のをふ苦ちまふけかく。えんにんをさん

ふうえて一方とことごとくやきたくして。又生じ又ちのごとくこれ火
まうまでさけどんとしてはとひらけば。猛火はうの入て大孫六角とちくかく
ひとつとく苦とうるの。子孝百子孫ふまをまぬるをしたれば修ふとき
張ごとし

第四　叫喚地獄の事

○はつふくうくうんぢごくといふハ。元合地ごくの下ある堅ところ。
とかしたる鐵漿の沸湯のごとの眼のまはりの火おもおるのこころを

火車
火未虫

地獄の所

の百夜として香ばしく。殺生偸盗邪婬飲酒のものは。ぢごくへ
おちる。又別のぢごく十六有。その中に火車とうづけるぢごく
ありむしろ酒とりしぶ少とくとくするものごとふおちて苦患を受く
一切不倫くすり。三の病のちまた百夜れいぐふに大州の人をるかりゝん
祖のたまこと病。又月ようもおそ。そ月内骨酒とのとくろふ又一の別れ
とやうに人飯ごるげくむしろ酒と人ふ赤ようてけらくたりまこまごり
て。まくと酒めるめ麦ふ落てを苦とうく獄の火のこつとと。居と
二百ひろく獄卒飛人とちくて。そ人の中ふゆゝしむとばほうからふ
いてるとこと〻ぐく消うせて。くちもふそとこへば獄卒活〻とこと
て。光とあぐれば又〻との中くにまる今。又もゝめのごとくに火の中ふ
行〻しむかのごとく。そ平市ふ茅とて苦とうるゆ止ぬ。はれの別れ

八俗の又のごとく。又獄卒飛人と叫責して倡とを記て曰く。仏の弟ふ
れ中そうぐひと記〻世ろを世の作法を授り菩提の〇と法とと
火のごとくふ酒のけまを行り深義の心ろとを

第五　大叫喚地獄の事

〇又ふ大〻〻〻〻んぢごくとは叫喚ぢごくの作にあり。そとと
おふ用じ。若のちまもおふむ〻ぢごくぢ。おのをりの地ぢごくふ〻びふれ
〻の十六の別所の一切のりろ〻の苦とを平をうはいおく。うるあり
人間乃八百歳を化乃天代一日夜として。その命八千歳あり。又化乃天乃命
とはぢごくの百日夜として。命八千歳あり。
はちごくに居り。獄卒飛人を叫責して倡とを記て。ひらく妄語八十一の
火ふれば。ひく大海とも焼ありりんや。その妄語の人をやうまを拾〻ふ

地獄の苦

地獄の苦

草木ことごとやくごとし。ゆえいかんぞ。その名の二字と。更絶者とふけり。煮てのの汁ともつて。飛人のはとし舌とと。ひとつぶ中つぬを嚙さけぶるをあぶるべし。又一ぶと更生を者者となづくべし。獄卒煮湯の沐ともつて。舌をわき寄。抜落れば又。沐ゆうまえるえ。ゆえいかんぞ。これとわく。お眼とわくまも。又舌とわくこと。又ことのとりて。舌をとるの。ひまなし。その力のとさることと。鉄いもたまるべし。とんや。肉丸とやかのごとくしぐ。鉄の者とう。ゆえいかんぞ。ゆえ妄語のむくひなりばかり。

とはのたまこと

（原文注釈書抄の
ごとくとる）

才六　焦熱地獄の事

○六ツ小焦熱ぢごくとは。大叫喚地ごくの下ふけり。たてよこ

丈おのおのなり。獄卒飛人とをとるべし。ゆえいかんぞ。鉄丸をとるべし。或ハ行。或ハ絶。ゆえいかんぞ。ゆえいかんぞ。ゆえいかんぞ

乃人はちのまつのぢごくの火とのごとしとぞ。あるくれ
りとぞ。ゆゑはいかの人のまをはなれて。他化自在天の一日夜をもつて。命一万
六千歳。又他化自在天の一日のいぬるごとに。ひぢごくの一日一夜をもつて。命一万
六千歳。教主仏盛世猛飲酒妄語邪婬の人は。ひぢごくに落とるなり。
[illegible]の中。又十六の別所あり。まづ中の一所をも。多衆離苦と名づく
罪人の一身のうちに。衆苦をもつぱらにうけ。火焔はもえさかる。まづ地ごくの人
かのごとくに。泣てとく。海とくとくまたかくのごとくに。衆苦多衆
離苦の地獄。水者て飲つべし。梅ようの法あり。罪人ひとりぶん
ぶひて。まり。郡くず道の四方ふ。完ひて。べくれば。完の中にいろんあり
火こまりくて。角石殿をること。ぐく焼をめる。ゆゑに又焼とは
ゆゑ止ざれば。まをかいちをくをみ約てらの中よりべくれば多衆離苦の地

ふ。のゆゑまをまをまを又百由旬。まを火よ焼死て又活り。まをあるて。まを
まづ地ごくにぞ。けり。地獄は。まを火の人をかり。餓死して天上に生れん事
をあはれぶ。又他人をとりてうる邪見を信じめるあひだぐくよ出ること。
又園火焔とあり。別所あり。四の罪人焔の中ふいりて
ようきくところあり。車輪のごとくにとくまろび出て見ふ。ゆゑ
かやうをめぐりくて。又とかるひ出て見ふ。ゆゑ
にうれちり。ぬきくて又生じ。まをこのごとくふ月をとぶ。ゆゑ方
止ことあり。これは人ぬをはつ。一切の法は〇と。ゆゑと二所あり。ゆゑ
といふは方。きとといふは大ゆゑりとかる。ゆゑの人うる苦とうるなり
衆苦のゆゑのこころとる。むろのものも。也とあんどるぶひ人えれと見あやまりて
は大地獄の火焔ふりて。きなりぬ月は天とおもはくべしめをば。いの

第六 甚樹地獄の所

獄卒
かんぐら鳥

ちこれをとりてみるに。あるいは[illegible]とをとりて。[illegible]
や。法華経の意と。陰陽はの離合のあらずと。元来相理にかなふ
と知るべしや。凡せんの僧俗まことにじも。学びざるもを知人まで
ばかりとい[illegible]。[illegible]とあの[illegible]むやどかまくさしばばかり
ことふるべる人あり。[illegible]も[illegible]むべきものの。三教とひろくこうる
といへども。唯に五乃学をれば。云教は花厳とふ無とあるをみがくう
向上に学ぶべく深き理をつくりうるるれども。深く[illegible]とくん[illegible]
とをろうのむかとくこまは文ぶんでがくけんや。為りとのべども[illegible]
偽の同とたやすくは[illegible]かるべ人は仏性と[illegible]城と[illegible]
大細ひとつ[illegible]法華経の[illegible]るべ[illegible]。[illegible]
実の学びとあるべきとをもつて。きふうれといべきて。[illegible]

貪婪を[illegible]受[illegible]をうてまこひづ[illegible]ぶる[illegible]乃理とよくもりてぶる
邪見不信ぶべ。[illegible]の地ごくとれをとそ。[illegible]のうてかとふぶべきうあるや

第七　大焦熱地獄の事

○七つ不大せう地ごくと云は。焦熱地ごくの下にあり。たてよこ五百由旬
者のおとまる。[illegible]大ちんゆがたぶ[illegible]あのこりの根本のぢごくさ又まれ[illegible]の
地獄との二切のもろ[illegible]乃者と十そうぞのぢごくにおりうるるぶ。ぢぶさには
説べうすべき命せ中初教生[illegible]不清浄の戒
とたのちるる色と汗しるるのぢごくかれつるこの悪業凡人まづ
中ちにて大ぢごくのあるちまとうる不。獄卒あり[illegible]
すきまぶ。とり極楽にして[illegible]陸とり[illegible]飛人まれと
まて大きにおぶべき[illegible]。[illegible]とのく。それ[illegible]利力

とひらめり。眼の大さにしてすべてのごとく眼のひとり大なるのゆく
ゆくりなる牛ハをさ〻のごとくふすべて薄くみかもちく然たちく
ひさしくとゝまりとゞこほりすべて一方わく〻くらをたゝまりきさりんをきゆく
ふり。飛人とゝとゝくて咽とゝくゝ結りてゝ三て六石子由旬乃至の中海のそこ
とゝ色さりて又海の外ゝ。三十六億由旬ゝ水にむりひてゝ
ゝ。千億由旬ゝ一切の風の中ハ業の風第一業の人
とゝひきのゞりてゝの不にいゝるまでふりゝとふゆきはけバ間ゝ五穀ゝ三
ふの麦ゝ結ふさてその浸色ごうの縄とゝつて志ゞりて引て地ごくふ
向ひゆゝむいまゞをくゝう大せう極ちゞごゝ乃ちびゝじく岸のゆゝとて
又飛人の帝さけぶゝと岸てゝふゝきゝうれひたまゝひたそゝるゝ〻ちく
づきて無量の若ゝとゝるゝとゝるゝたゞくのごとくにて手者百ゝ万億

業とゝ泣ゝとゝふゝと歩てゝ歩てゝ帝さけぶゝ〻ちゝ歩て杖そゝりきゝうゝ千七
う億ゝ杖そゝりゝ〻ゝ歩きゝゆゝごとくゝ〻ゝ杖ゝ〻ゝ師ゝ杖ゝ〻ゝ杖ゝ〻ゝ杖ゝ〻

第七大焦熱地獄の図

り大業苦汁のこゝろ。ものの火にやける苦。獄人ものの刑にそゝらるゝ。
こゝろをわゞを。業に住業苦とも。まゝ〳〵苦。焼やまぶと唱でさけぶバイろん。
こゝ。八寒氷一切人界の侵害夫と。犯〳〵。色のはぢゝ不義ゝ。又二つの刑罰と
バ。業苦一切苦悩とそ。久ぶるゝ。ゝ。ろ刀とめきまつて。身の皮とのこゝ。面わ
ゝまでゝ。ゝ。ゝ。

めぐさりびぢごとの若ふくふるまへば大海のまきにけたまひ
乃ちはどしぬ今の苦ハ一まきひのあくまの苦ハ大海の水のごとしまん
ぢ嗅てそれとも地獄へりおそ向ひさるゆ二万ゆ由旬にしてその
阿鼻地獄の罪人の嗅さりぶ苦ゆ獄卒乃ふーやくれとふり十悪
をのおそろしくたまーぬをきくくまて義の中のごとくく。さちさゆま
なりて。二ゆ半を経てまゆ半に向ひゆく　広説会経果報　の阿鼻地獄乃ふ川
こうハ。たてよこ八万由旬ゆり。七重のくろがひ乃城ーぜえのくろがひの網
ひり城の下ゆ十八のぐそあり。城のまわりーハ。ぢぐの林ひーと者
ぢ乃すきゆハ。洞乃大ゆ者。ゆのうけゆ十由旬なりまるこハ。ぢぐひり先ハ
をふぐ嵩ハつるぎれ山ゆくろがひ乃うばーのごとー。一切ゆ毛のわるよう
猛火とぞ出ーくるまきふぐりくさくーて世乃にたとえむりのまゆ十八人

の獄卒ハ武ハ剣ゆまきをふくくろがひのむほどばーでゆぐりして牙ハ上へ向ゆ
ぐーあひ城ゆぞみちゆふる武ゆ乃ふ牛の武わ。ーのかーらゆ又ゆる
十八の角ゆてぞ角ゆさにとりゆ。猛火とぞいふーくる。又七重の城門ゆ
くろがひの幢七ゆわーとのくろがひ乃ふーとゆ乃ちさようゆ火のとり出ゆる泉のまに
ふ川ゆくーまでのふぐるとわどばーの又城門ーみちーくりゆ牛の門のやうふ
ハ。八ゆの釜よりゆ出ゆる泥ゆ又城門ーまちふりゆの一ーの角ぐそのま
乃ハ。八方ゆのくろがひ城と大地とにりくるぐ毒とりきゆ火とたてぞの方ゆ
城ゆーとびとりーとりゆ。ま地のかゆるーふ。唯百ゆのいたちの嗅ーくるぐごとくゆり
大さるるくろがひのむゆ。ゆのふるごとく城のうちにぞ満ーくるゆ八百住乃
七重ゆ八方ゆのぐしちつるゆ面のふーくゆりしもし

才八の鼻孔
獄の示

のうちとき。獄の火はもえさかんにおこりぬれば百千由旬まで。あまねくてらし
てやきぬ。又八方住処の苦の中に若あるものはいだくふ集りて
新伝三味経の 孫伽婆乃井に乃若よりひろく八方多百踏俱盧の二倍
界おのおのの大鉄地よりおこりて火あり。しばしばほのおとわかれて起きたり。
このあつの有情をさいぜんとうがち。肉を入。筋をとおし骨をくだけて
髓をとりて先とやくうまとし。熱き油をうちぬりまつて火をつも
しばくにて一方ことごとくやけきはまりて東方より西方にきはる
のごとくず。南方西方北方も又かのごとくなり。されば苦より苦を
とりつぎの有情ともに火花をちらしまどいて奥をのわひをこ
ぶよりほかはなしとおもうてかのうちにあるいは若蒲
とうるもの又おびただしくも間かしかのうちにあるいは飛人ばかりうちかたれた

だひとりあるのみにてたづねもとめてよびうしなひぬ苦をとき
流せるかとおもひたちまちに又くろがねの網をもつて二種のくろがねの網と
をもつて網をもつて又鐵の地よりたちまちに大鐵の地のかくのごとく
ありて又くろがねの地をもつて又その中よりも。苦をかぐのごとく
いづれの有のうるおいをもつて牛乃皮をもつてごとくにおほひ
けり住て又きりふ鐵の地乃うへにおのおのくさのびふさせて鐵の地乃うへ
ふせ口をとぢひらかせて三種のたちをもつて九をせとなれば
うえて脇腹ふとりて下よりのぼり又わらび孫をもつてそのくちふさぐ
振中ふうれ入。脾胃腸胃とかたわらとなりて流れ出ぬ
三種とは火焼焼極焼焼通極焼焼

ぞうびんなりさん。あまりふ者のようさんびぢごくのざいにんハたせう極つ
ぢごくをそ地化自立天乃たけ〜とかるどくにぞう〜をくるゆ
ゆ天下のさうちゆや欲界六欲天の其ぢごくれ奥けとかぐうゆ〜ぱろ
しの身情ことぐく命もきゑてきさぬ〜ゆふいんとかゆ〜ぶ
ゆろ〜のぢごくれくさいめそ。ゆろく奥さん。又ちの奥けハ仏とゝて
さたゝざるぞとゆふゆ〜ぶ。ゆ山没ぢと公付ゝる二河の大山ぐゝ
ゆそ。ゆの奥さとぢ〈きりとり。又のゝ人一切のぢごくのゆ。ゆ〜ゆ〜ぐくのゆ。
ときうん時ゝる身に又ぢゝん。ゆ〜たへてうくゆ〜ハ別命うえぬぐ〜
いたいうんや。あびぢごくハ子ゆ上けて二河ともとさ活ハずと
宣ゝ。ゆ又いうんとゆふゆ〜ぶ。活つくゆ。ゆ〜ゆ〜ぐきゝとも
ゆぐゝぶ。ゆゝふべゝ〜ぐれバゝ。ゆ一活ゝ手人まて。ゆつゝ手人

わゝバ血血とゝゝゝ死ゆんとゝ。正法会陀羅 杪のゝゝ 山 ゝゝ地ごくハ命一中初ゝ。
供今倫の 又逆飛とゝゝ。ゝ肉果乃道ゝとゝちハゝひゝゆゝゝのと見ひ
きゝ。大乗の法とゝゝ中ゝ中ゝのとゝとなゝ。伝ゝとむゝゝ食
ゝるゝのゝぢごくふれつゝ。新ゝ三時後の 山 ゝ地ごくの門の門
のれゝ。又十方の眷屬乃別ゝあゝ。ゝ中の一文ゝ。鉄ゝ干食ゝと
ゝゝゝ。飛人の方乃上ゝ。火のゝ
のぢごくれ中ゝ。ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。さゝん身白のごとくふて身とやぶゝ骨とくゝ
ゝる脯ふゝ。ゝゝ。ゝの牙ゝる狐とも出ゝ来ゝて食ひゝゝ。ゝの
ごとく苦とゝゝてゝゝ。ゝふ止ゝ。ゝれハむゝ堂塔伽藍、
火とゝけて仏像とゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

ぢごくホむる。又別不行。玉肚不とそ名付る。仏かすくるたぐ
其方とやきこだいゆホまり。ヨゴ肉むらとくてひろくくいそしきゆこ
異バ又生ゆ。又喰ヲ。又肚乃玉子脆あり。の飛人とまつひて
先ゆの中ゆ。消〳〵ふるゑくてり。けるひハ猛火ホ入て焼こぢ
し或ハ大ぐまホなげ入て。これとおこれと惑る。骨ちくむしみとくる
と書乃氷のごとくこそ。やり〳〵又くて火とさすに猛火とゑるがの
ごとく極〳〵苦毒のとうけて。世界を住業と陸に名ぐこれハむイ
仏乃賦物ととりのちわて食ぞ〳〵るのめぎ苦い落る〳〵又別不者
石山極不とゑびけて由旬ぐらい乃くちぐものぷとりてり
飛人とおひ〳〵ぎくぐくるゆ。ぎんん乃やり出けて又は又ぐぬ
又十一の苦ゆそ。あま〇くめぐり。せ、みあとやさゆ又獄卒力とみく

ぢうちとあま〇くきりさゆそ。拍撃乃かまりとぷみくゆ不入猪ごとゆ。又
巨石ゆ猛ととりく異ゆきやりぷかのごとゆ苦とりるゆ。仏住業といふゆぢりを
むり〳〵禅文仏乃食とゆて。別ゆ〳〵喰そ。けて又ぢるのめりく落る。又別不者
闇婆度不と名付る。はぢごゆて闇婆といふ死るけりまゆ力の大きゆる者
夢のごとく。黄ゆるぢうのごとくけて又ゆの目ゆ玉ゆ名る飛人をとりけんで。虚て
もるゆ猛ゆ入て去。赤ゆてまひ拍びま。猛ゆまて跳ねとゆ〳〵ゆ勢ひ
ぢとくゆて。大石のおゆるどとゆ〳〵。まゆ力猪ゆ百くとゆりて又けひあそ生ゆ
又はゆまてあゆる。熱ゆ〳〵る者のごとくゆて。ゆ臭腔ゆゆゆりゆ紀又ゆの歯
けゆる物ゆて。ゆとそゆゆ喰ひゆ。かれゆ〳〵苦悩とうけて止まゆ
むゆ〳〵たとゆ〳〵ゆとゆまのぢくぜんとゆさゆめて渇死ゆ。あゆ〳〵めゆるゆ。この
ぢごくホ落ゆ。はゆりゆ極ゆ苦ゆのごとゆ〳〵　已上地獄全体の苦ゆ。次ゆ餓鬼の苦ゆ

鉄聖子
玉肱公

肱婆羅公
勾山泉公

八大地獄ごとにちかくとりの別和とれり。是ぞ。かの一切の地獄
の大獄落在ぞ。るぼ家小屋の家のさまにいの門あり。そのの極こひとりて
あるきひきまのびも入ざりくり。ぼ家の屋門のごとく。出れば一この門のかぶ屋
の屋をかり。ま家にうづま火ま燃ひとし。かのうろくの有情ぞ。有り
とりとめんとそ。熱くあそびゆくまにあのかくし火乃ごとたぞ是と
むろせば。ま屋にに是のまくむくし筋骨まで焦こもぐたるまま入是
とあぐれば又生ぶ。は燈火ぶ。あひたぐ焦て。るぶく屍糞泥ぞ有りるこの
もろくの有情どもやどりぞ。のとめんまぞ。うづま火のりとまま
いぞ。やりくるりわぞぶ。屍糞泥の水ぶ入。らもあるもおぞきま
くり。あまつまへまぞ水。嬢雑吐といるぞ。たまこみちくて有りる
皮とうぐち肉こり。筋とこちちり。やにり。髓ととりてぞ喰

こるる又屍糞泥こ歩つぐまぞ。るるく。利刀つまの刃とのとのけて。乃と
ぞすぞのりくのの有情ども。やどりとのとあたりまつはぶまわとび
まぞ。是とむろせば。あちまちに皮肉筋血ととくまてぐれまくり
て。是ととれば天のごとぞ。又つるぐの乃ぶ。うちまぐきぞ。るるく刃乃林
ありぞのりくの有情どもやどりとのとぞ。るるく林のりげく都きまく
ぞば。やとらぶまちぶ。傷うる風ぞげくくて。刃の多と吹ぞくく多
のぶりぐとまちちまぞ。ぞぶ地ぞたるれぐるぞ。わまさむくぐて
石の骸とまちまちまぞ。りぞ。喰ひりり。刃のまやぶ。おつぐまぞ
るるぐ。くるぐのいぐくぞ。ぞ。地のごとくある。梨の林の有りるぐかの
りくり乃有情ども。若りとりとめんまくあまぞ。をかちまぞるる
むまぞつかぞの本上るとまぞ。やぐくの地さるる面ぞ地にむりひて

ちゝつゝめさぶりかんとさゝーとそ年。又いでゝこの獄ハ上下向ひて住さ
とゝ。そ時て決乃宿のうへ大焦肩のうへ光わぐり。つるひハ角く
わぐりわそ月の玉とぬきこらふ。炎の林のすとうそろもかく歩
つゞき大きさ廣さ八百で。ものこうへる水つつき底を平にみちて
びゝうのあるゝのあ情ども。やゞりとあゝりもとめつゝかゝこと
ゞ寒りきゝひしかふゝを落て名りゝ大谷を豆といまこゞびゝ炎
にそうく焼て業ゝ百おゝ。そるゞとくゆのまきあゞるに。おゝてゞ
ひそ。わまひゝくめゞゝりゝゝりゝ又いゝめゝゝく。おそゝろゝきハ。ゆの
ゝのゝきまゝのゝふハ。獄卒ゝつまたゝゝゝるゞ。ゝくゞゞうゝちすまゝおゞり
絶。大綱とゝまへゝ。かの者情とさへゞゝりて。ひゝのとゝ。ゝゝげわんゞ
嬉娘ゞ斧とゝや。猿猴ゞ月ゝあひむゞゞゞあゝひハ絶と首ゝ斧

あゝひハ。綱ゞそゝをゝひとゝゝ大獄決のたのゝにゝ情ども。とおゝとの
けて。紐ゝとゞおゝりゝる。決ゝこの度伝のゝあかゝるゝゞゝ八分ゝ名る
ゞ。ゝゝゝりけゝゝもゞゝと決抜ゝてゝゝに。ゝゝゝとひゝゝゞそゞひ
ゝゝしハ。ゝの情その時ゝゝゝしけゝゝゝゝゝゝ。我ゝえゝゝ
おゝゝにて。紀ゝゝりゝあゝりとゞゞゝりゝるゞその時ゝ獄卒ゝゝゞの
ゝふゞりゝとゝゝて。ゝゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゞのゝまゝゝと見ゝ上ゝゝゝゝゝ大ゝゝゝゝゝ。我ハ住
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

などとあつめて門とて門のぢごくれぱらの門をはなちぐ西に千
ぱらの園有 已上法花経のこころぐしてこのぢごくのぱらのあるはおのく
ぱらの業有金剛十六大地獄の八大地獄の八大ぢごく十六別所おのくぱらん
多といはんやうまず
又頗梨沙羅の八寒ぢごくあるぐ八熱地獄のぢ
あるとぞ。あるとあり

往生要集巻之上終

往生要集
愛宕寺
41.4.7.
(京都にて)
3冊揃 ¥1,800.-